

今こそ読む この1冊

潮木守一

桜美林大学大学院招聘教授

苅谷剛彦著

『教育と平等——大衆教育社会はいかに生成したか』

(2009年 中公新書)

戦後日本を支配したのは、平等主義だった。小学校の運動会では、子供たち全員が手をつないで横に並んでゴールに駆け込む。これが子供の個人差を明らかにせず、すべての子供を平等に扱う平等主義教育の模範とされた。いったいこの平等主義はどうやって登場したのか、その起源を探ろうというのが、本書の狙いである。



これによって格差は解消されたが、それだけ義務教育は画一化された。著者が問題の焦点に据えるのは、むしろこの標準主義、平等主義の世界の「パラドックス」である。確かに日本は全国津々浦々に均質な義務教育を提供することに成功したが、そのことによってかえって他の部分での格差(著者はその例として、高校段階での差異化、出身階層による学力格差をあげている)に対する関心を失わせた

戦前の格差教育から生じたトラウマ

著者によれば、そこには戦前の日本のトラウマがあったという。戦前の小学校が地域の財政力によって、どれほど大きな格差が生じたかが議論の出発点となっている。その当時、財政力のない市町村では十分な教育条件を整えることができなかった。その結果、大きな地域格差が生じた。教員一人当たり児童数をとっても、正教員の比率をとっても、教員の平均給与をとっても、児童一人当たり教育費をとっても、戦前は大きな地域格差があった。

戦後の歴史はこうしたトラウマを克服することから始まった。そのために導入されたのが「標準法」という考え方である。つまり標準学級規模を定め、一学級当たり教員数の標準を定め、児童一人当たりの標準教育費を定め、児童一人当たり標準教室面積を定めるといった、さまざまな標準を定めることで、全国どこへいっても均質な義務教育が提供できるように仕組みを整備した。

この成果をわれわれ日本人はあまり認識していないが、外国人から見れば驚嘆に値する。山村にゆくと、それほど経済力があるとは思えない田舎が、どうしてこれだけ立派な学校が持てるのか彼等は一様に首を傾げる。これは世界に誇れる標準法の成果である。

教育論パラドックスの落とし穴

ただ著者の真意はこの標準主義の成果を賛美し、平等主義の成功談を語ることにあるのではない。確かに

と説く。「格差の部分をもとにして共通の部分だけ取り出して批判するのが、画一教育批判の常套句」であり、「共通の部分をもとにして格差だけを取り出して批判するのが、格差教育批判の常套句」になったという。いいかえれば「単純な二項対立図式を立てて、いずれか一方の視点から他方を批判する」のが、教育をめぐる議論の落とし穴となっていると説く。

バランスの考慮が格差解消に繋がる

多くの教育論が堂々巡りで終わり、収斂することがないのは、この堂々巡りに陥っているからである。同じ人間が議論の出発点に立てた原理を、後のほうでは批判する側に回っていることがよくある。著者が他の著作でいっているように、「教育は永遠に解決できない課題を抱え込むことによって、教育論だけが永続する」。最近好んで議論されるのが、格差問題である。いまや格差解消の大合唱が起こっている。誰も「格差を見逃すべきではない」ということはできる。それは批判の余地のない正論である。それならどうしたらいいのか。人間は利己的であるとともに、利他的でもある。人間は勤勉であるとともに怠け者である。同情心に富んでいるが、残酷でもある。結局のところ両者のバランスをとるしかない。ただ筆者のリアルな認識がニヒリズムに繋がらなければよいがという危惧に、筆者はどう答えるのだろうか。